

クロマツコンテナ苗へのショウロ接種方法の検討

○宮崎恵子, 富川康之, 古賀美紗都, 陶山大志
(島根中山間研セ)

Investigation of inoculation method for *Rhizopogon roseolus* to containerized *Pinus thunbergii* seedlings

○ Keiko MIYAZAKI, Yasuyuki TOMIKAWA, Misato KOGA and Hiroshi SUYAMA
(Shimane Pref. Mountainous Region Research Center)

Key words; *Rhizopogon roseolus*, container seedling, *Pinus thunbergii*

【目的】近年利用が進みつつあるマルチキャビティコンテナを使用して、ショウロ (*Rhizopogon roseolus*) 感染クロマツ苗を効率的に作製する条件を確かめた。

【方法】①孢子懸濁液接種：培土として鹿沼土細粒とココピートオールドを容積比 3 : 1 で混合し、さらに木炭区 (培土 : 木炭 = 1 : 1) を設けた。3 月上旬に 150ml キャビティヘクロマツを播種し、4 月下旬に孢子懸濁液 10ml (孢子濃度 1×10^5 /ml に調製) を培土へ接種した。接種後、30 日間隔で菌根の有無を観察した。②培養菌糸接種：培土はココピートオールドとし、春季と秋季に 150ml キャビティヘクロマツを播種し、6~10 か月間育成した苗を 300ml キャビティへ移植した。接種源はブドウ糖ペプトン液体培地に含浸した日向土とし、ショウロ 14 菌株を培養 (22°C、40 日以上) した。播種から 50~90 日での接種は接種源を培土へ埋め込み、6~10 か月での接種は移植時に根鉢の側面へ接種して鹿沼土細粒を客土した。接種の 2~6 か月後に菌根の有無を観察した。①、②ともコンテナは屋外に置き、積雪期のみアクリルハウス内で管理した。また、いずれも元肥としてハイコントロール 085 を施用 (2.5g/150ml) した。

【結果】苗毎にショウロ菌根の有無を記録し、感染率 (苗数割合) を算出した。①孢子懸濁液接種：木炭区の感染率は 100% であった。菌根が確認できたのは接種から 60 日後と 90 日後で、30 日後には認めなかった。これに対して、木炭の非使用区では菌根を認めなかった。②培養菌糸接種：播種から 50~90 日に接種した場合は菌根を認めなかった。播種から 6~10 か月に接種した場合は、春播種・当年秋接種・翌年春観察と秋播種・翌年春接種・夏観察は 14 菌株とも感染率が 50% 以上で、感染率が 100% の菌株はそれぞれ 6 菌株と 1 菌株であった。また、春播種・翌年春接種・夏観察は菌株毎の感染率が 0~100% で、感染率 50% 以上は 9 菌株であった。菌根は 5 月以降に認め、6~7 月は増加傾向にあった。コンテナ育苗において効率的にショウロ感染クロマツ苗を得るには、培土へ木炭を混合する条件で孢子接種は有効であった。また、菌糸接種においては作業時期の影響がみられ、最適な管理条件の解明は今後の課題である。